

Case2. 「品質・納期・コスト+エコ」を先取りして差別化



プレス加工から2次加工まで、一貫ライン生産を強みとする越前たけふ工場(福井県越前市)。(画像提供:大和金属工業)

大和金属工業(大阪府大阪市)は、金属をさまざまな形にプレス加工する金属加工の企業である。提供する製品は幅広い。太陽光発電のパワーコンディショナの筐体(容器)、蓄電池の筐体、ファクトリーオートメーション機器などさまざま。同社は、社員の働きやすさややりがいを目指すために、フラットな組織を目指してさまざまな工夫を行っている。チーム横断で動画を撮影し、SNSに投稿する取り組みもその一つだ。同社の橋本孔志社長は、「社員がのびのびと働くようになり、定着率が上がったと感じています。最近では、若い新規人材の獲得に向けてSNSを積極的に活用しています」と手応えを語る。

同社は環境に対する取り組みにも力を入れているが、その背景には、他社との差別化を図る狙いがあるという。「当社はプレス加工技術の1つである絞り技術を得意としていますが、世界でオンリーワンの技術を持っているわけではありませぬ。これまで、我々の業界では品質、納期、コストが企業価値の基準でしたが、この先はエコであるかどうかも重視されるでしょう。判断基準が変わる前に、他社に先んじて環境に対する取り組みを行うことで、自社製品の差別化に役立てたいと考えています」と橋本氏は力を込める。



今年2月には工場一部に太陽光発電設備と、自社製造のパワーコンディショナの筐体(容器)を設置した。(画像提供:大和金属工業)

**大和金属工業株式会社**  
多様化する社会のニーズに対応するために、確かな品質管理と信頼される製品づくりをモットーとしている。大阪府と福井県に計6工場を持つ。

認証手続きのハードルを越え  
新たな世界を広げる



メイン商品の1つである太陽光発電のパワーコンディショナの筐体(容器)。(画像提供:大和金属工業)

製造業のための  
**脱炭素化入門** Part3

中小企業が取るべき国際認証

SBT認定の取得企業に聞く  
経営への活かし方は?

認証を取得することで、脱炭素経営に取り組む企業であることを広くアピールできる。中小企業向けSBTは、中小企業でも比較的取得しやすい国際認証だ。中小企業向けSBTを取得した再エネ100宣言 RE Actionの参加企業に、取得の経緯や手応えを聞いた。

取材・文/山下幸恵(office SOTO)

Case1. 持続可能性を追求し、地域と社会に必要とされる企業に



ランプにLEDを搭載したLED-UV印刷機。従来の印刷機と比べて消費電力が約80%少なく、オゾンが発生しない。(画像提供:大川印刷)



石油系溶剤0%のノンVOCインキ。石油系溶剤をまったく含まないことを示すマークも自社でデザインした。(画像提供:大川印刷)



初期投資0円で設置した太陽光発電。これによって本社工場で使用する電気の約20%を賄うことができる。(画像提供:大川印刷)

環境対策は「バリュー」  
企業は社会の持続性の上に

SBTとは「サイエンス・ベースド・ターゲット」の略で、日本語では「科学に基づいた目標」という。パリ協定が求める水準と整合した、企業が設定する温室効果ガス排出削減目標のことだ。SBTという国際イニシアチブが運営するSBT認定を取得すると、持続可能な企業であることを対外的にわかりやすくアピールできる。SBT認定には中小企業向けがあり、温室効果ガスの排出量が一定値未満であることや、大企業の子会社ではないことなどの要件を満たせば申請できる。

要とされる人と企業を目指すという思いから「ソーシヤルプリンティングカンパニー®」という指針を公表し、石油系溶剤を使わないノンVOCインキや再生紙を使った印刷に取り組んできた。中小企業向けSBTにチャレンジしたのは、18年に環境省の補助事業に採択されたことがきっかけだ。「二酸化炭素(CO2)排出量の測定に取り組み、紙の印刷物によるCO2排出量の約8割が紙の製造工程で発生していることを知りました。そのため、紙を薄くするなど、CO2削減にはどのような対策が有効なのか明確になりました」と大川氏は振り返る。「そもそも、経営の持続可能性は社会が持続することが大前提です。環境対策はコストではなくバリューであり、社員の幸せともつながっていることを多くの人に気づいてもらいたいと思います」と力強く語る。

株式会社大川印刷

太陽光発電の自家消費と、青森県横浜町の風力発電設備から電気を購入することで、19年に工場で使用する電気を再エネ100%とした。